

# 謎の枝廣城考

枝 廣 信

## 一、はじめに 謎の枝廣城

枝廣城（正式には枝廣山城。以後枝広城と言う）

読者諸賢は聞きなれない城名と思われるだろう。従って又その存在を知る人も極めて少ないに違いない。

備後の三大郷土史料と言われる「備陽六郡志」「西備名区」「福山志料」にも一切その固有名詞は出てこないのだから……

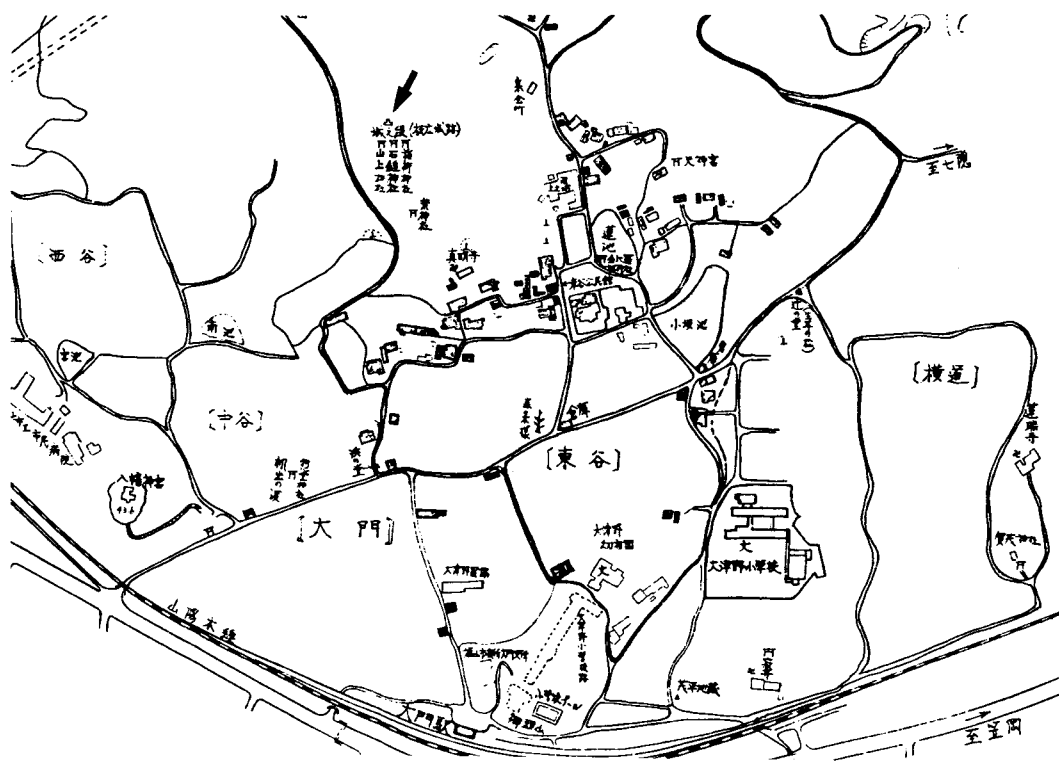
然し枝広城は確かに実在した。

場所は福山市大門町大門（旧深津郡大門村）東谷である。土地の人々は通称「城の段」と呼び、現在枝広城の呼称は現地でも徐々に忘れられつつある。

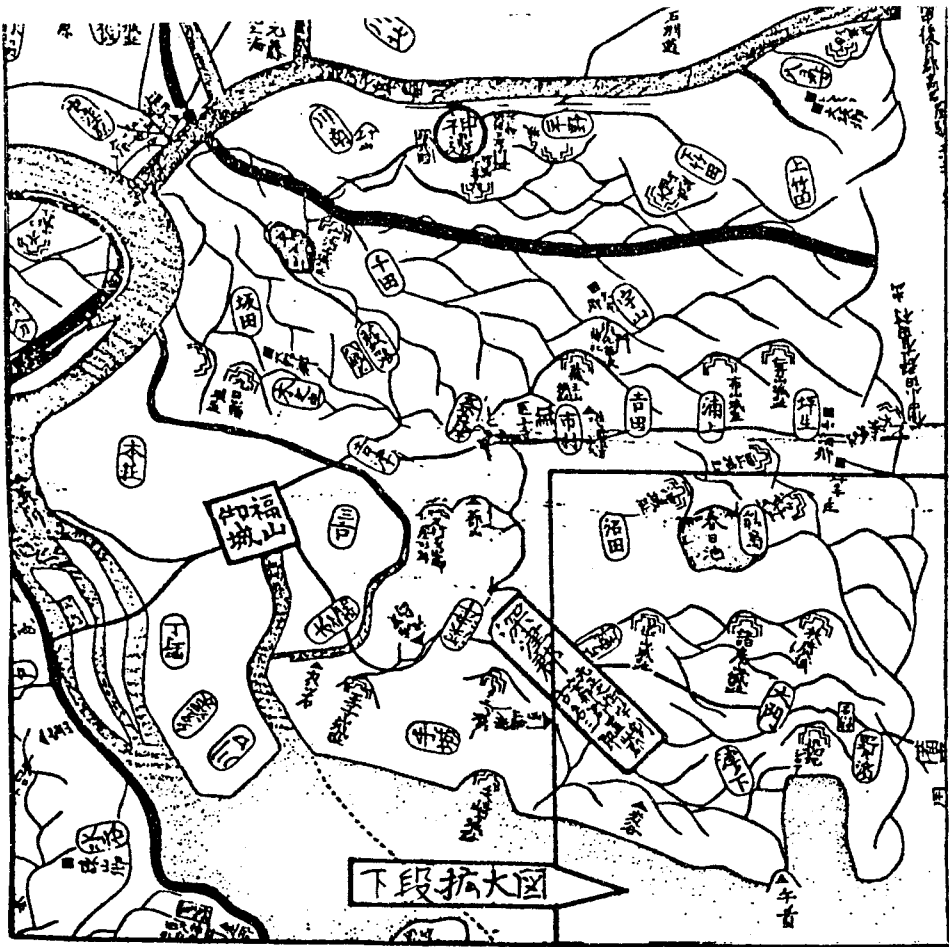
だが地区の小誌（「ふる里のあゆみ」）には判つきり記載されている。

（地図①参照）更に決定的な証拠として次ページに掲げたように江戸時代の備後大絵図（地図②福山市民図書館蔵・福山市赤坂町赤坂遊園内集古館常設展示 原図は淡彩）にも又豁然と記載されている。

一体、なぜその枝広城が誌上から忽然と消え失せたのであろうか？



地図① 吾古里東谷全図



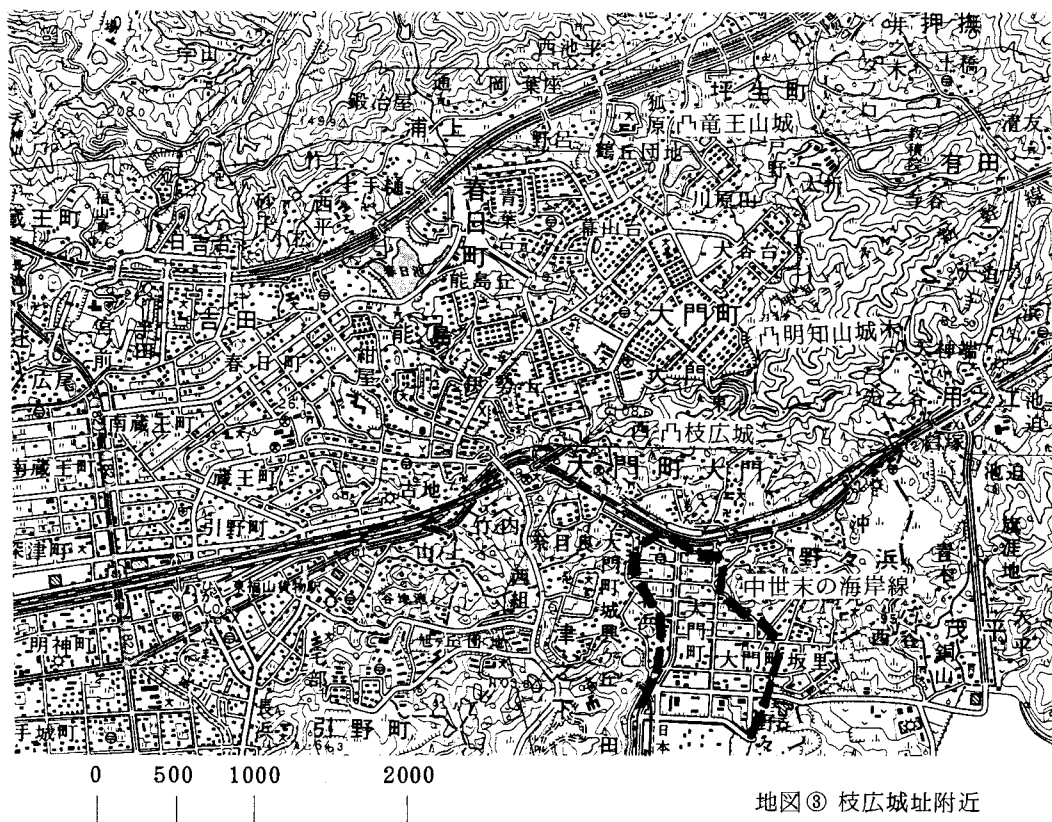
地図② 江戸時代備後大絵図（部分縮小）



右訂正図（筆者）



上掲地図拡大図



5万分の1 井原・福山

地図③ 枝広城址附近

そもそも枝広城は、誰が、いつ、何の目的で築城し、いかに機能したのであろうか？ 長い年月が伝承に加担することによって造られた誤まった虚像は、いつの間にか実像となって我々の歴史認識の中へ固定していく。四百年以上を経て、殆んどの人に忘れ去られようとしている枝広城の謎にどこまで迫れるか判らないが、あえて私はその謎にアプローチして見たいと思う。

その前にまず、枝広城が機能したと思われる戦国時代を中心に、全国的情勢、特に中国地方、備後南部に焦点を当て、述べて見たい。

## 二、全国的情勢 風雲と枝広城

応仁の大乱は両軍主将の死によって漸次下火となったが、却って天下は麻の如く乱れて、下剋上、弱肉強食、骨肉相喰む、いわゆる戦国動乱の世に突入した。だがその混沌たる戦国の世も天文の頃（一五三二―一五五五）になると、次第に地方ブロック化の傾向も見られるようになった。中国地方では山陰の尼子氏、山陽の大内氏、毛利氏が覇権を巡って角逐に寧日なかった。天文の初め頃までは尼子方がかなり優勢で、度々山陽地方まで脅かしたが、永くは保てなかった。

地方豪族はその度に右顧さべんし変節を繰返していた。

天文九年（一五四〇）尼子氏は大兵を発して、毛利氏の安芸（広島県）郡山城を囲んだが、大内氏の来援などもあって敗北を喫し本国へ逃帰った。大内氏はその勢いを駆って、天文十二年（一五四三）毛利氏、小早川氏らと共に、尼子氏の本拠、出雲（島根県）富田月山城に兵を進めた

が、神辺城主杉原（山名）理興等の裏切りにより大敗、命からがら逃帰った。前者の轍を踏む愚を冒した訳である。

天文十三年（一五四四）大内氏は前の失敗に懲りて、尼子氏の本拠を衝く作戦を捨て、先づ備後神辺城主杉原理興を征伐すべく陸海より兵を進めこれを包囲した。このあたりを「福山市史」は史料的にも信頼できる「小早川家証文四三三号」に抛り次のように述べている。

「……備後外郡五ヶ荘（または五ヶ）は坪生荘より分離したその南部の海より一帯の地で、今日の大門、能島、野々浜、津之下（以上福山市大門町）および引野（福山市引野町）を含む一帯の地と思われるが、天文十三年（一五四四）大内氏がこの五ヶ荘を竹原小早川氏に預け、この地の内に神辺城攻撃の拠点となる一城を築いて堅固に抱えさせることにしたのは、竹原小早川一族が、海上に発展しており、海上連絡に便宜を持っていたからであり、天文十三年八月七日付で、弘中隆兼に対してこのことを実行するよう申し送っている。（小早川家証文四三三号）」

註、同証文はこの章末尾に原文を付す 筆者

「広島県史」も同様の文意である。

神辺城は攻防実に六年に及び、遂に天文十八年（一五四九）落城し、杉原理興は出雲に奔った。（後、赦されて城主として帰り咲く）

次いで毛利氏は弘治元年（一五五五）敵島の戦いで、主君大内義隆を弑逆した陶晴賢を滅ぼした。

更に永祿九年（一五六六）毛利氏は出雲（島根県）富田月山城を攻撃して宿敵尼子氏を降伏せしめ、遂に中国の覇者となった。

注、後の中央の覇者織田信長は同じ永祿九年美濃の斎藤竜興を破り、漸く上洛の端緒を掴んだ許りであった。以て毛利氏が既にいかに強力であったかがわかる。

永祿十二年（一五六九）毛利氏九州出兵の隙に乗じた山名の遺臣藤井皓玄は奇襲によって神辺城を一時攻陥したが、逆襲に保ち得ずして敗走、浅口郡大島村（現岡山県笠岡市）で討死したといわれる。

天正六年（一五七八）山中鹿之介は主君尼子氏の遺子、勝久を擁し播州上月城（兵庫県）に立籠るが、毛利軍はこれを攻畧、勝久を自刃せしめ、降将山中鹿之介は護送途中高梁川阿井の渡しで謀殺された。

ひるがえって、目を京師に転ずると……

それより先、永祿三年（一五六〇）桶狭間に今川義元を斃した織田信長は、その後念願の上洛を果し、天下布武の道をまっしぐらに駈上っていたが天正十年（一五八二）明智光秀の謀反により京都、本能寺で最期を遂げた。

当期、信長の命で毛利氏の属城備中（岡山県）高松城を水攻めにしていた羽柴秀吉は、逸早くそれを知り毛利氏と直ちに講和、いわゆる中国大返しで摂津（大阪府）山崎、天王山に光秀を破り、後、天下統一、そして死闘関ヶ原の戦、大坂の役、徳川氏による幕藩体制、明治維新……歴史は、大波小波のうねるが如く、ドラマを繰返しながら進んで行く。

「小早川家証文四三三号」 原文

四三三 大内氏老臣連署奉書寫

外郡之内五ヶ事爲無主之条對竹原方可被預遺候然者於彼在所一城執付之堅固可被相抱之由對家来老者中可被申渡候彼衆之事海上通路可

輒之条被得其心之分別候様可被申与之旨候恐々謹言

八月七日

(吉見) 興滋 (花押)

(青景) 降著 (花押)

(陶) 隆滿 (花押)

(隆兼) 弘中三河守殿

三、「備後三誌」に於ける枝広城 伝承の枝広城

津之下村	備陽六郡志	西備名区	福山志料
城址記載なし	城址記載なし	城址記載なし 海雲山光円寺縁起 大門村揚知山の城主云々	城址記載なし
大門村	古城二ヶ所 城山 岡志摩守景勝 明知山 藤井皓玄	明知山城 当城は大永年中岡志摩守 開築して住みしと云ふ 城主 岡志摩守安氏 同石見守安清 同志摩守景勝(房) 河野(藤間)光重 藤井皓玄 (エピソード)	城山城 岡志摩守景勝 (事蹟) 古城 年代城主シレス

野々浜村	古城一ヶ所 塩飽大力之助 藤井太郎左衛門光重	明知山城 飽浦四郎左衛門尉 塩飽太刀之丞 塩飽太刀之介光久 藤間太郎左衛門光重 藤井太郎左衛門好長 同 三郎左衛門 藤間十郎	明知山城 城主 塩飽大力之助 藤井太郎左衛門尉光重 (藤井は藤間の誤也ト) 藤井能登守入道皓玄
------	------------------------------	---	---

次に準序として枝広城(と思われる城)が「備陽六郡志」「西備名区」「福山志料」(以下備後三誌と言う)それぞれの中でどのような記述をなされているか見てみることにした。

当時大門湾は深く湾入していて、(地図①②③参照) その沿岸の野々浜・大門・津之下、三ヶ村(後の大津野村、現在福山市)は、五ヶ荘の内でも一種の村落共同体的な関係にあったと思えるので、枝広城の存在する大門村と共に、津之下・野々浜両村の項も関係事項のみ簡単な表にしてみた。

今改めて検証するまでもなく、旧大門村には古城址は一ヶ所しかなく、それが〃城の段〃と俗称されている枝広城である。

この事実を踏まえた上で、前頁の表により「備後三誌」を比較検討すると「備陽六郡志」に言う〃城山〃「西備名区」に言う〃大門村明知山城〃「福山志料」に言う〃城山城〃が枝広城と考えられる。

さて、その城主として、前記「備後三誌」を含め、凡ゆる資(史)料の

中で、岡志摩守景勝の名を挙げないものはなく、又これを否定するものも見当らない。

岡志摩守景勝は確かに枝広城に在城していた実在の人物と推定して、まづまちがいない。

言いかえれば、岡志摩守景勝の在城していたとされる城はすべて枝広城の異名である。現、福山市大門町幕山に、岡志摩守景勝の弟を祖とし

〃城名を以て名字とす〃と伝える枝広一族がいる。

その祖廟(といっても小祠であるが…)である通称〃毘沙門様〃の祭神の一柱に〃枝広城主岡志摩守景勝霊神〃とあるのも例証となし得ようか。

枝広城と密接不離の関係にある岡志摩守景勝を探るのが、同城の謎に近づく鍵であると思ひ、次章では彼の伝承と史実について述べたい。

#### 四、岡志摩景勝の伝承と史実

#### 群像と枝広城

「広島郷土史談」抜粋

②明知山城：深津野々浜にあり、城主飽浦四郎左衛門尉は「建武ノ乱」のとき、もし中国から南朝方があらわれん場合には、備前の三津石で東上する足利勢を食い止め楠、新田勢の官軍を助けようと、赤松筑前と三津石で力戦したが空しく討死した。

③明知山城：大門にあり、大永年間、岡志摩守安氏が築城したものの。同石見守安清、同志摩守景房（景勝）などが居守していたところ、天文年間、四国水軍の河野刑部左衛門光重というものが不意に城を囲んだ。その時折悪しく城内は無勢で防ぎにくく、四方を囲まれては不利ゆえ「船出ノ渡リ」に出て河野勢と戦っていたところ、先づ石見守安清が矢にあたって討死したから、子の志摩守景房はわづかな家来をひきつれて一方の血路を開き上方さして逃げ、五畿内の知人をたよって落ちていった。のち里人たちは憐れに思い城主の霊を慰めるため「惣堂社」という社を建てた。この近辺に上塚という所は石見守の塚、下塚は討死した家来の塚。首塚は石見守主従の首塚。落城後は河野刑部左衛門光重、同万之丞光圓、河野幾三郎光明（六八郎）などが居守した。

山城」と併存しているとしている。

二、「福山志料」では大門に於ける戦死は岡志摩守景勝としている。

三、「西備名区」に拠ると、大門明知山城の伝承の続きは、河野光重が後、天正年中（「福山志料」では弘治三年、他に寛正年中の史書もあり）隣国笠岡山の城主陶山国時に敗死せしめられる様子を仏教説話的要素を混じえて詳述している。

四、船手の渡り」は、帆手の渡り」の誤り。

先ずお断りしておかなければならない。

「西備名区」では岡志摩守景房（景勝）とあるが本稿では景勝のみを用いている。理由は特にない。他の資（史）料の多くが、景勝を採用しているからという単純なものである。若年の頃景房と言い、後、景勝と改名したのかも知れない。武将にはよくあることである。

さて、「備後三誌」の景勝伝承は大同小異であり、その記述を取捨選択、要約（尤も「西備名区」に偏重したきらいがないでもないが、）している「広島郷土史談」（福山市民図書館蔵）の関係分を全文上段で紹介した。

岡志摩守景勝の伝承について二つの大きな疑問を抱いた。

その一、天文年中に一地方領主同士が軍独で相争い、攻ぎ合う事があった、或いはできたであろうかという点。私にはそうは思えない。若しあったとしても、彼我共ども、その背後には必ずや大国の意志が働いている筈であり右顧左顧して朝に尼子、夕に大内、毛利と節を変える

(註)一、本書も亦「西備名区」と同じく、野々浜明知山城」と、大門明知

も、その時どきの旗幟は鮮明にしている筈である。

まず、独立独歩の一匹狼の伝承だったとは思えない。必ずや歴史の線の上の点、面の中の点であった筈である。

とすると天文年中の備南に於ける重大事件と言えば杉原理興の神辺城攻防戦である。杉原（尼子）方の岡志摩守景勝は、その前哨戦で優勢な水軍を擁する大内・毛利・小早川方の河野（藤間）光重に追落されたのではなからうか？（と始めは推理していたが……）

その二は伝承の岡志摩守景勝落去の様相と、彼を追落したとされる河野（藤間）光重が後、陶山国時に追落される（「西備名区」）様相が極めて似通っている点、更に後年、永禄十二年（一五六九）神辺城を一時攻陥した藤井皓玄が奪還され敗走する（第二章参照）様相にも共通点がないとも言切れない。

岡志摩守景勝の落去伝承は何かの投影ではないだろうか？

ことと注目すべき一書がある。

それは郷土史家故土肥日露之進氏の「広島県備後国旧深津郡古城趾考」（福山市民図書館蔵）という「日本城郭全集」（人物往来社刊）の原稿である。氏はその中で野々浜明知山城と大門明知山城を「誌上合併」せしめて、それぞれの城の沿革、城主の事蹟等を野々浜明知山城に「誌上統合」せしめ大門明知山城（枝広城）を「誌上抹殺」している。故意ではないが勿論誤りである。

然し土肥氏は同書の中で極めて注目すべき事を書いておられる。

即ちそれは、岡志摩守景勝は小早川の老臣、岡与三右衛門尉の子で、杉

原理興の神辺城征討に当り一時野々浜明知山城に在城したといっているのである。

更に伝承の中で岡志摩守景勝を追楽したとされる河野（藤間）光重は後年、永禄十二年（一五六九）藤井皓玄の神辺城奇襲に同心した阿波三好党より派遣された部将で、敗走の途中、備中（岡山県）浅口郡鴨山城主 細川下野守通董の急追に津之下村月の浜で討死したという。他の資（史）料と全然異なることをかなり断定的に書いておられる。

いつの場合でも定説に近くなっている通説、伝承を祖上にのせ、それを大胆に否定し、百八十度違った新説を唱えるには勇氣がいるし、よほどランクの高い資料と確信がなければできないことである。

※同書の関係分の縮少コピーを次頁へ掲載した。

若し土肥説が真実なら「備後三誌」の景勝伝承も、筆者の疑問（一）も勿論すべて誤りである。

果して岡志摩守景勝の去就、動向はいずれが真実なのであろうか？

更に私は「備後太平記」の中に、注目すべき次の発見をした。

「沼隈郡鞆津軍勢猿楽能之事」の項。

そこには天正六年（一五七八）播磨（兵庫県）上月城に尼子の残党を滅ぼした毛利軍将兵が（第二章参照）備後、鞆に凱陣、当時織田信長に逐われ、毛利氏を頼って鞆に寄寓していた足利義昭は将士慰勞の猿楽能を催し、それに陪席した百八名の武将の中に「岡伯耆守景信、岡志摩守景勝」とあるのである。

土肥説とつなげば、この事は一本の線となって立派に符合する。



明知山城

所在地、旧、深井御野之淡村字横道

現、福山御野之淡村字横道

山城、標高一八二米

由緒、野之淡村は古代に於て「大野不郷」の一部と推定され、もと石川村と云はれ、室町時代には備後国外新五箇御の一ツに加へられしも、文禄二年(一五九三)元朝氏控地の時、野之淡村と改稱す。明治年間以後、行政区画の変更により、崖と所居を異にせりも、昭和三十七年一月臨時の調査、春日村と云は、福山市に合併されて今日に至る。

創築年記不詳、源平の争亂、南北朝と室町時代、戦国時代の古戰場地帯不詳、史料依りず、城主名も不詳に、正権の言は記述し難し。  
永享年間(一四二九)に、後藤藤左京進基孝が在城し、その後、明應初年(一四九三)頃、沼隈郡下山田村の一桑山城を、後醍醐中興の一族、子羊の者が在城した。天文年間未に至り、大坂・毛利氏が、安部郡神辺城主、秋原重隆府忠興を任封するに可たつて、小早川隆景の老臣、岡く子三在正内殿の子、門左衛門景勝をして、後醍醐の権將として、一時在城せしめたる。

現在、城址には一の丸、二の丸の二平地地があり、掘木で覆

内をめぐり、昭和三十七年頃迄、飲料水用の井戸があつたが、今は埋れ、至所在が利取し、  
在望は、元和初年迄ありしも、備後福山城を築きし時に、掘りお明し、暈が所より水と伝えらるる。

附記、明知山城と、郷土史書及び老園者・光明寺の伝記に、藤岡利都少輔老等・室野十初在正内某等と揚

示して、そののり、藤岡・室野等は本城を、  
永禄十二年(一五七九)に、備中国後月即正堂山城を、

あつた、勝守能登入道能去り、然らばにより、阿波國の三好

氏のかえに同意し、其が七、敵百人を、阿波國より登進し

本中の都將や、門守神辺城を一時攻陥せたりてあつたが、

逆襲に遇ひ、門守を傷つ事を得ず、敗走し、能去り、  
は備中国後月即正堂山城、藤岡・室野等は

野之淡・津上本村迄(即ち大門橋)逃れ、船に乘

じて備後國へ逃去るとせしむ、備中国後月即正堂山城を

細川下野守通春の急進に、脱出する事能はつして、津之

本村字丹の渡辺にて討死したのである。其子、光明・老園

は降伏し、助命目され、門守の身に入り、雅賢僧とすつた。

若し岡志摩守景勝の大門に於ける天文落去の伝承が真実ならば天正六年（一五七八）小早川軍の一將として輅に現われる筈はない。

景信と景勝は書き方から見ても極めて近い血縁関係で、景信が目上と思われるが、判つきりした両者の関係は判らない。

次に「備後太平記」の関係分抄を紹介する。

「沼隈郡鞆津軍勢猿楽能之事」

去程に播州佐用郡上月城没落し、西国の諸軍勢勝利を得、悉く備後鞆之津へ帰陣す。時に大樹感悦斜ならず、武功の武士、粉骨軍忠を抽でし諸軍勢を、悉く鞆津城内へ被召、懇に宣ひけるは、凡そ將たるものは、敵国を治むる時は、

地を裂き、賞肉を分、功を賞し、時を踰す軍政を行ふと雖も、吾は悪臣平信長が為めに、身を西海に墜す。時に今、士卒の功を謝しがたとしと宣へば、郡下皆感応式代す。今日幸に晴天白日なれば、敵退治の軍政に猿楽の能を興じ、戦労を休止、饗餐すべしと被仰しが、頓て北の丸へ御下り在れば、棧橋高くかき上げさせて、粉骨功名の武士召し集められければ左は毛利、右は小早川の軍勢、御前には毛利右馬頭輝元、小早川左衛門佐陸景、河野兵部少輔通直、毛利伊予守元清。次に左の棧敷には、宍戸安芸守隆家、吉見大蔵大輔広頼、福原出羽守貞俊、内藤修理大夫、上原右衛門大夫、出羽十郎元秋、熊谷豊後守、益田玄蕃頭、天野中務大輔、山内上野介隆通（一本後太平記には名を闕く）、同刑部少輔通定（同書に此の人を欠く）、杉原播磨守盛重（同書に名

を欠く）、同弥八郎元盛（同書に此の人全然欠く）、三須筑前守、成

羽紀伊守、口羽下野守、赤穴左京亮、小笠原弾正少弼、佐波常陸之助

（介）、三刀屋藏人之助、舞台の庭には、桂左衛門大夫、同上総之介、

同忠次郎、児玉周防守、同三郎右衛門尉、渡辺石見守、志道大藏介

（同上書には助につくる）、林肥前守、門田信濃守、内藤河内守（内

藤の上二宮信濃守を同上書には加へてある）、市川式部少輔、杉小

次郎、坂新五左衛門尉、木原兵部少輔、三吉（同上書には好）佐渡守

光茂（同上書には名を欠く）、神村豊後守、大庭加賀守、土倉対馬守

（同上書に二人を欠く。その替りに宇野道花入道、同九八郎がある）、

粟屋右京大夫 同肥前守、天野左衛門尉（同上書に五郎右衛門尉とあ

る）、三上淡路守、福岡彦右衛門（同上書は終りに尉がある）、桂因

幡守、転右衛門尉、粟屋紀伊（同上書に伊豆とある）、三浦兵庫守

（同上に頭とある。）井上相模守、渡辺民部少輔元（一本光）、同左

衛門尉（同上に此の二人を欠く、たゞ渡辺又左衛門尉がある）、児玉

若狭守、右は小早川の軍士一列す。棧敷の上には、小早川藤四郎元綱、

立花左近将監宗茂、大宮司左衛門入道、秋月三郎種長、高橋三河守秋

種、舞台の庭には浦兵部之丞、弟に世良源左衛門尉勝重、小田孫兵衛

之尉、三吉備後入道、同式部大輔隆慶（一本後太平記に此の人、及び

次の二人を欠く）、同名大炊之助、同丹後守、飯田讃岐守、小泉左衛

門尉、南三河守通弘（同書に名を欠く）、平岡左近将監、河内備後守、

鶴飼新右衛門尉、井上伯耆守、横見三郎左（同上、右に作る）衛門尉、

同和泉守、井上弥兵衛尉、有地民部少輔元盛（同上名を欠く）、同次

郎右衛門尉景信、同左京亮、同右近亮（同上、以上三人を欠く）、榑崎三河守元安、同弾正忠元兼（同上、以上二人を欠き、替りに榑崎十兵衛尉がある）、磯兼右（同上、左とある）近大夫、白井縫殿之助（同上、丞とある）、井上豊後守、虫上弥兵衛（同上、弥左衛門尉）、杉原七郎左衛門経珍、栗原左衛門佐実胤、横山河内守義隆、入江大蔵亮正高、岡左衛門進、長谷部大蔵左衛門尉元信、木梨民部大夫元経、椋梨左衛門尉包久、上原左衛門大夫元佐、東郷平内、高野山五郎兵衛尉元久、安原民部少輔元吉、岡伯耆守景信、同志摩守景勝、赤川左衛門亮、同十郎兵衛尉（一本後太平記には杉原七郎左衛門経珍よりこゝに至る迄の人々を欠く）、村上掃部頭、同賀曾岡左衛門尉、生口孫三郎、因ノ島新左衛門、梨羽中務大輔、是の人々粉骨功名、比類なき戦功、可抽諸武士也。皆太刀をはいて跪く。式三番終つて食籠、名酒佳肴、種々の珍菓を賜はり、鳥目三千疋、帷子、単物、山の如く積み上げ、猿楽に是れを給はれり。見物の大小名、悉く金銀青銅を木の枝に附け、舞台に積み重ねぬ。己に感能人の心を碎き、律筋声耳目を清ます処に、俄に青天暗く成り、予州道後の方より、黒雲矢の如く飛び来たり、霹靂天地を裂き、雨車軸を轟かす。人皆雨声に魂を動かせば、大樹義昭公も驚き給へ共、暫く御座を定め座しける処に、雷忽ち零ち来たり、城門の前成る町家を焼き立てしかば、群吏騒ぎ漂ふ事、唯綱代の魚の如し。見物の貴賤魂魄を驚かし氣を失へば、大樹も城に入り給ひ、諸卒は国々に馳せ帰る、扱も不思議の天災哉。時日多き中に、かゝる軍神祭祀の場に雷火落入こそ奇怪なれ、近年予州新田の宮の鳴動、

今日軍政勝賀の天災は、唯是れ足利氏の御代は是れ迄ならんと。

尚、「沼隈郡志」の々、輒猿楽能々の伴りにも、培席の将士僅か二十一名の中に岡志摩守（名を欠く）の名が見える。

然し岡伯耆守景信の名は見当らない。なぜであろうか？

「沼隈郡志」の關係分も紹介する。

#### 「猿 楽 能」

将士各次を以て坐す、御前には毛利輝元・小早川隆景・河野通直あり、左の棧敷には穴戸安芸守・杉原播磨守・福原出羽守等あり。右の棧敷には浦兵部三吉隆慶・有地民部・榑崎三河守・入江大蔵・木梨民部・岡志摩守・村上掃部頭・井上伯耆守等あり。舞台の庭には、渡辺民部少輔・神村豊後守・桂左衛門太夫・土倉対馬守・兒玉若狭守・粟屋右京太夫等居並べり。一騎當千の猛将勇士綺羅星の如く居並び、名酒嘉肴の食籠を前に陳ね鳥目帷子単物の纏頭を舞台に積み、感興人心をたらし、羽律耳目を驚す。まづ式三番より舞ひ始めしが折から一天俄に掻き曇り、豫州の方向より、電光凄まじく閃き来り雨車軸を流し、霹靂天地をきりさき、凄愴謂はん方なし。

流石剛強の武士も、威風あたりを払へる將軍も、共に心悸き魂稍に、為んすべなく顔見合はする所に、俄然帛を裂くが如き爆声と共に落雷し、城門前の町家火焰に包まれたり。將軍も最早此迄なりと城に入り、

軍卒も我れ先きと逃げ去り、折角の興も烏有に帰せり、人皆眉をひそめて、足利氏の運命盡くる前徴にやと云ひ合へり。是れより後信長凶刃に倒れ、秀吉和を毛利と締結するに至り、義昭の素志全く頓挫し門前雀羅を張るの否境に陥れり。於是義昭より白傘袋、毛氈鞍を許されて、親任厚かりし山田一乘山城主渡辺民部景迎へて己が城に帰りしが、後一時堺に移居し、又秀吉の計ひにて毛利家へ預けられ、深津菰山の仮館に余年を送り、慶長二年大阪にて死去せり。

「備後太平記」の史料としての価値は「小早川証文」ほどの信頼は置けないし、土肥氏も既に故人なのでその出典も訊ねることはできない。

少しでもランクの高い史料をと望んだが、現在の所まだ発見し得ない。然し岡志摩守景勝が小早川家臣であることは、状況証拠から見ても先づ確かだと思われる。

ここで一応整理して見る。

伝承Ⅱ岡志摩守景勝は河野（藤間）光重に追落されたが、光重も又後年陶山国時に敗死せしめられた。

土肥説Ⅱ岡志摩守景勝は小早川氏の家臣で神辺城攻めの際派遣された武将である。河野（藤間）光重は後年藤井皓玄の神辺一揆に組み細川下野守通董に討たれた阿波三好党の部将で両者の間には全然関係も接点もない。となる。

土肥説を支持し、次善の方法として、伝承の真偽を問うべく数理文献学的思考に消去法を加味して岡志摩守景勝をめぐる人物を探って見る。

果せるかな、細川下野守通董の菩提寺である長川寺（岡山県浅口郡鴨方町）の「細川公由緒記」（印刷本）には土肥説を裏付けるに足ると思われる二通の古文書の写しがあった。関係分を掲載する。

於神辺城阿州衆數輩討捕之由及度々如此段忠節無比類候次至播州表会出勢候浦上自然相働儀有之者備後兩國相談可氣遣事肝要猶藤賢可申候也

十一月九日

義昭公 御判

細川下野守とのへ

去八月阿州衆其外諸牢人罷出刻被殘置衆則取懸及一戰數多被討捕之由具申上候御感之条被成御内書候御面目之至候猶相心得可申候由被仰出候 恐々謹言

十一月六日

細川右馬頭

藤賢 判

下野守殿

足利義昭より細川下野守通董に与えたもので、文意は、「神辺城に於て阿州衆數多討取る功を嘉したるもの」 一通

今一通は「義昭の近習、細川藤賢がその事を義昭が非常に喜んだことを伝えたもの」 一通

ただ河野（藤間）光重という固有名詞が実証されなかったのは残念である。

左記文書は「榑崎文書」であるが、これも有力な傍証であると思うので掲載する。〳阿波之三好家〳の文言が見える。

榑崎筑後守御断書写

(前略)

一 私親三河守随分元就様・隆元殿・殿様以来被遂御馳走候、御両三殿様御感状十七御座候つ、中にも備後神辺之城、備中之藤井一類之者共、阿波之三好家之手合仕忍ひ取候、備後国中いつき再発仕様候処、木梨・有地両城江三河守兄弟之者共さし籠、家中之人しち取置則神辺之城へすかり、死人ておいむねとの者共八十余御座候つ、則切返し杉原兄弟入城させ申候、藤井一類備中高屋家城に取籠候之処、則取掛落去仕候、其時元就様・殿様御加判之御感状ニ御家之再興ヲ仕たるとの御感状、其段ハ殿様御失念被成間布哉と存候（『萩藩閩閩録』卷五十二榑崎与兵衛書出）

以て見て来た通りに、伝承はまづ誤まりの疑いが濃く、相対的に土肥説は岡志摩守景勝の去就、動向に限り、心証的にも信憑性の比重を強めていく。例え確証はないにしろ土肥説は確かな説得力で私の胸に迫ってくる。

(付) 尚、陶山国時については、本稿の主旨には直接関係なく、却って記述が複雑になるので、實在性に根拠のない事のみ申添えて割愛させていたゞく。

最後に岡志摩守景勝の岡氏族の中に於ける〳位置〳について考えてみたい。「備後太平記」〳鞆猿楽能〳では明らかに嫡流と思える岡和泉守（名を欠く、和泉守を称するものは正吉・就栄・景忠と三人あり、就栄カ筆者注）と岡伯耆守景信・同志摩守景勝との間には二十三名の武将の名が記してある。

「萩藩諸家系譜」岡氏の項には、嫡流の岡和泉守の名は見えるが、伯耆守景信・志摩守景勝の名はない。恐らく嫡流の系譜のみで傍流は記されていないのであろう？ 伯耆守景信・志摩守景勝は傍流・庶流だったのではないかと。そうだとすると系譜に登場しないのも無理はないかも知れない。伯耆守（名を欠く）は一級史料である「萩藩閩閩録」などにも度々登場する。だが志摩守景勝の名は登場しない。通称でも登場しているのか？ 然しそれらの資料に登場しないからといってその存在を否定することはできない。

度々書くように凡ゆる資料に大門村の城主として岡志摩守景勝を挙げているし、又それを否定するものゝ全然無いところからむしろ實在の人物と推定して間違いなさそうである。

只、今まで調査した事を正しいとすると、伝承の中で景勝の父だとされている石見守安清、その先代とされている志摩守安氏存在は極めて疑わしいと言わねばならない。

関係機関を通じて入手した「岡譜録」は未だ完全に読解していないが、研究員の言を俟つまでもなく岡志摩守景勝の名は出てこない。然し同譜録はかなり後代（享保年中？）の編であるので〳某〳とか〳名不知〳と

いう個所が散見される。同譜録に実名が見えないという事のみで岡志摩守景勝の存在を疑うのも又早計と言わねばならない。

「西備名区」によれば岡伯耆守景信は神石暮ヶ峠和泉山城主とされていゝ。苦勞の末、伯耆守系図を入手した。

同系図は、私見によれば、後代（不明、然し、福山）の地名が出るころから、水野氏福山築城以後であることは確実）書き初められ後、代々書き加えられたものらしい。自家の系図を作製するに当り、不利、不名誉と思われれる事をも述べている事からして、かなりの信用性を持つものと思う。同書中には実名はないものゝ、大胆に推測すれば、岡志摩守景勝に比定し得る人物がないでもない。

然し同書は勿論私資料であり公的に史証として取上げるのは躊躇せざるを得ない。結局、岡志摩守景勝は岡氏の一族子弟のものとするのが妥当であろう。

岡志摩守景勝を含め、枝広城を繰る群像の実相を明らかにし得る確度の高い資料の出現を待望するとともにその後考を待ちたい。

## 五、二つの明知山城 流転の枝広城

今まで見て来た資（史）料で次のように推理した。

推理というよりも、表現を変えれば必然とは言わななくても当然の結果であると信じている。

現在の大門付近の地勢からは、戦国期の海岸線は到底想像できない。

当時は牛の首と防路ヶ鼻を岬として、大門湾は内陸に深く湾入し海岸線

は旧国道よりまだ北まで侵入して枝広城山麓の真明寺のすぐ下あたりまで迫っていたと思われる。

小早川家証文四三三号を引用した「広島県史」「福山市史」を思い出していたゞきたい（二章）。天文十三年（一五四四）小早川軍は大門湾を神辺城攻畧の爲の補給港湾とした。

神辺城の杉原理興を征討する為、五ヶ荘内に構えた一城はどこにあったのだろうか？ 枝広城こそが、その一城ではなかったろうか？ ご承知の通り、当時は陸路より海路の方が、はるかに迅速に且大量に人員、物資を輸送できた時代である。

枝広城はその目的からして、揚地城又は単に揚地（知は宛字）とも呼ばれた。当時揚地城の呼称が一般化して後の混乱を生むもとなつた。

揚地とは、荷揚地・揚陸地の意である。

この時点で「西備名区」「広島郷土史談」の大門・明知山城は揚地城と書き改められなければならない事が判る。

明知（アケチ）と揚地（アゲチ）と余りにも音（おん）が酷似しているために、後世の人々は混乱し混同し或いは枝広城を誌上抹殺する誤まりさえ生んだのである。

枝広城（揚地城）を大門・明知山城とし、野々浜明知山城と同名併存せしめ（「西備名区」「広島郷土史談」）或いは二城を誌上統合しして枝広城（揚地城）を抹殺（「広島県備後国旧深津郡古城陞考」）する誤まりを冒したのは同じ五ヶ荘内に偶然、明知山城と揚地城という極めて似通った音（おん）の城名があったのが混乱のもとだった

のである。

こうした山城は、その遺構の文化財的価値は勿論であるが、それが存在した歴史的背景の中で考察することがより重要であると思う。ではなぜ枝広城を揚地域と断定できるのか？

再び思い出していたゞきたい。

「西備名区」津之下村の項の海雲山光円寺の縁起の件りに「大門村・揚知（地・知は宛字 筆者注）山城云々、とあるのを紹介したことを……」  
「揚知山城」とは「明知山城」の書き誤まり、宛字だろうと安易に考え、同じ「西備名区」の大門村の項には明知山城として、野々浜明知山城と同じ城名に書き改めた。（第三章、表参照）

そして結果的には明知山城を一人歩きせしめたのである。  
大門・明知山城が枝広城の異名であることは第三章の説明の通りである。つまり遂に大門・明知山城が揚知山城の宛字だったのである。

そこで大門・明知山城（大門・揚知山城）⇨枝広城という図式が成立つ。尤も当時は宛字を平然として用い、それを自他ともに格別怪しまず容認していたらしい点にも原因がある。

「旧大門村には山城址は一ヶ所、枝広城のみである」

以上は文献上の解説だが、臨場的にも又同一の結論を裏付けている。即ち野々浜・明知山城の本丸址は目算で二十坪程（六十六㎡）しかなく、とても当時の本丸址とは思えない。

枝広城の方はこれも目算で五、六十坪位（百六十五㎡～百九十八㎡）はあろうか。

又「位置」（地図③参照）枝広城は当時の海岸線に極めて近いと思われ、物資の陸揚等にも便利であるのに対し、野々浜明知山城は海岸線より比較的遠い。P24の地（絵）図②は、距離、方位等に厳密な正確さを要求するのが無理な江戸期の地（絵）図にしても、両城の位置が反対に書かれ、正しくは「枝広城」と記されている位置が「明知山城」そして「揚地」の下に（枝広城）すべきであろう（図②下段訂正図）。

地（絵）図作製当時も混乱、混同が見られる。  
因みに明知山は現在もその通り明知山と呼ばれ、山頂（本丸址）には、NHKテレビ中継所があり、その地底を走るJR新幹線のトンネルも又明知トンネルと呼ばれている。又、野々浜・明知山城を本城とし、枝広城を支城だったのではないかとする向きもあるが、それは前述の理由からむしろ逆であろう。

野々浜・明知山城は古い城址をそのまま放置してあったのではなからうか？ 尤も監視哨程度のもは当時も置いてあったかも知れない。

尚、枝広城付近には血腥ぐさい修羅の址の地名や城址らしい古地名が沢山ある。曰く「死人の谷」「お首の曾根」「上馬場」「鞍の下」「的場」等々。然し野々浜・明知山城の付近には殆んどない。

これは藤井皓玄或いは河野（藤間）光重が神辺城合戦で敗走の途中、一旦この城（枝広城）に拠って抵抗したとも考えられ、地名が一般に時間の流れに耐えて極めて残り易い事を裏付けている。

そしてその事が後世、藤井皓玄を大門城主と錯覚せしめたのかも知れない。

「第七回水野勝成公支干祭記念誌」に故浜本鶴資氏の遺稿として「水野家に仕えた領内旧城主の子孫」の一文がある。氏がその中で「枝広城の子孫」として藤井皓玄一族を挙げておられるのもその辺りの考えかも知れない。

最後にもう一度強調しておきたい。

野々浜・明知山城と揚地（知）山城は全く別の城である。

随って既に定説に近くなっている「備後三誌」の伝承、およびその後の研究者諸家の解釈はすべて誤まりであると思われる。

## 六、まとめ 究極の枝広城

備南の戦国史は神辺城を措いては語れない。殆どこの重大事件は神辺城を中心にかけている。

天文年間の神辺城に拠る杉原理興との攻防戦、永祿期の藤井皓玄との一時的な攻防戦がその代表的なものである。

天文十三年（一五四四）神辺城攻畧を目指した大内・毛利・小早川軍は、内海の制海権を握る優勢な水軍を擁して大門湾を補給港とした。

そして「無主」の五ヶ荘内に枝広城を構築し、神辺城攻畧戦用の補給基地司令部（近代戦用語で言えば……）とし岡志摩守景勝を司令官として派遣した。

枝広城はその目的、性格から揚地城又は単に揚地（知）とも呼ばれた。

（この事が後々の混乱を生むもととなった）

神辺城攻畧成った後、必要不可欠な城ではなかったらしくそのまま、放置

されたと思われる。岡志摩守景勝はどの時点で退城したかは判らないが、後年、天正六年（一五七八）「轡猿楽能」に培席している。

城は永祿十二年（一五六九）藤井皓玄一派が敗走の途次一時抵抗に利用したかもしれない。又、岡志摩守景勝を討ったという伝承の河野（藤間）光重は、藤井皓玄の神辺一揆に組した阿波三好党より派遣された部将で細川通董に討たれたという。

岡志摩守景勝落去の伝承は河野（藤間）光重討死の事実の投影であろう。最後にもう一度、明知山という山があるのに眩惑されて「大門揚地（知）山城」とわざわざ記してあるにも拘らず「明知は揚地とも書く」（福山志料）などと安易に付会して、後世の歴史家・研究者を混乱におとし入れたのである。

枝広城の謎については、私自身の独自の見解を述べたが、岡志摩守景勝の史実については大筋で土肥説を踏襲した。

それが数理文献学的思考からも最も辻褃が合うと思うからである。

枝広城をめぐる論証は、細部に至っては未だ研究の要はあろうが大筋では以上で間違いないものと信じている。

即ち、天文十三年（一五八五）よりの神辺城攻撃にあたり、五ヶ荘内に構えられた一城（小早川家証文四三三号）は枝広城（揚地城）であり神辺城攻畧の大きな力となった。

そして城将は岡志摩守景勝である。

「備陽六郡志」にいう、「大門村城山」「西備名区」にいう「大門村明知山城」「福山志料」にいう「大門村城山城」はすべて同一の城（枝広



城)であり、又揚地(知)城、揚地(知)山城も枝広城の異名である。  
戦国時代大門湾付近に発生した伝承、争乱の多くは枝広城(揚地城)を  
舞台としたものである。

枝広城の謎を解くキーワードは「揚地城」だった。